【福島大学むらの大学アーカイブ 26】【大熊 Chapter7】

確かにそこにある　征男さんの大熊町

杉本征男さん

【インタビュー日時・場所】

第 1 回インタビュー　2024 年 9 月 27 日・大熊町役場いわき出張所

第 2 回インタビュー　2024 年 11 月 4 日・いわき市文化センター

【聞き手】

人間発達文化学類　大野地央

行政政策学類　　田中友陽、八巻結花

担当教員　鈴木敦己、実施協力　佐藤亜紀

プロフィール

昭和 16 年生まれ。定年まで学校事務職員を務め、

震災後は大熊町夫沢 1 区行政区長を務める。

震災時は田村市や会津地区に避難、現在はいわき市に在住。

【第１回インタビュー】

―小さい頃は何をして遊んでいましたか？

杉本：ちっちゃい頃というのは、やはり女の子なんかはお人形さん遊びなんかをやった。それからお手玉、おはじき。男の子は、春夏秋冬あるけれども、夏は水鉄砲から始まって、それから、探偵ごっこなんていうのをやった。何人かのグループに分かれて、人質を木にゆわくんだ。今だったら大変だよね。それを、番してる人がいるの。それをこっちの仲間のほうが、助けに行くの。おとりを使って守ってる人のことを引き出している間に助けるみたいな。そんなことをやったり。

それから缶蹴り、石蹴り。例えばこんなふうに（陣地を）やって、こっちからちっちゃい石を投げるんだ。最初はここからポンと。それで、（次の陣地に）飛んで行くの。この石の入っているところは入れないの。例えば３人でやって、最初の人はここ（の陣地）だけど、2番目の人は今度、ここ（最初とは別の陣地）に入れたとするでしょう。そうすると、次の人は、ここ（スタート地点）からここ（石のない陣地）へ飛んでいかなきゃいけない。そんな遊びもしました。

それから、おはじき、あや取り。あや取りなんていうのは女の子なんか。それからだんだん、メンコ。正月なんかは自分でたこを作ってたこ揚げ。それから竹馬。竹馬なんかも自分で竹を切って、自分で足場も作って。そして竹馬で隣の友達のうちに遊びに行くんだから。竹馬で鬼ごっこやるんだからね。竹馬の下を竹馬でくぐった。高い竹馬を作ったら、下を竹馬でくぐったの。だから、竹馬に乗ってる人がもう、こんなとこに足があるんだな。竹がこんな曲がって、こんなにして。それでしみ解けするもんだから、たまたま途中で滑ったりすると今度、竹馬は竹をつかむために裸足で乗るから、それがしみ解けのところに落っこちちゃうんだ。昔はどろんこだから冷たくてな。

仕方ない、そういうときはいったんうちに戻ってくる。それで改めて遊びに行って。低いところでは乗れないから、隣のうちの馬小屋なんていうのは、2階にわらを上げといたので、その棚のところを利用して乗ったり。ワラボッチといって、わらを積んでおくところがあった。そういうところに上がって、そこから竹馬に乗ったりなんていうようなことをしました。

それから冬になると、火の用心なんていって、子供たちがみんなで木を。拍子木というんだけど。こんな。よくお相撲さんの最後にやるでしょう、ああいうの。トントン、火の用心、トントン、トントンと。

それで、いま言ったら大変なんだけど、冬になると軒下に干し柿がつるしてあったの。蜂屋柿を皮むいて、こんなんして（干して）。それがだんだん色が付いてくるわけ、透き通って。その柿を取ろうとすると、ぼたぼたっと落っこちるんだよな。うちの人は分かってるんだよ。「野郎めら、やってるな」。でも怒りもしないんだ。

それと、夏なんかは、川とかに遊びに行くわけ。そうすると、がき大将がいて、トマトなんかは取って来いというんだ。がき大将だから、取ってこないと仲間外れにされる。取りに

行くんだ、スイカなども。ころころ転がして。そんなことをして遊んで、ばんばん出世。
　あとは、ワラダというんだけど、こういうふうな竹で編んだ籠なんかが。ざるみたいな、平たい大きいこんなの。それにイモを干してあるわけ。それもちょうど乾いて、干し芋になる頃に、こそこそ、失敬してくるんだわな。そうすると「こらっ」ってうちの人は言うんだけど、別に追いかけても来ないし。今のようにお巡りさんに言ったり、学校に電話したりはしない。なんでかというと、みんなその親さんたちも子供のときそうやって。それと、何か悪いことをすると、どこの子供でも本気で怒った。今そういう人いないんだよな。
　話は全く変わるけど、ある勤務地にいて、私に電話が来て。何日か前に田んぼの用水路の掃除をしたんだって。そうしたら、田んぼをやっていたおじいさんが、「せっかくわれわれがどぶ掃除や、堀掃除をしたのに、石を蹴飛ばして入れてる子供がいる。よくよく見たら黄色い帽子をかぶっているから、1年生だと思う。学校で注意してくれませんか」と。「ちょっと待ってくださいよ。その子供は明日になったら、あそこの場所で石を蹴ったなんてことは、おそらく頭にないでしょう」と。「それを学校で、だから、『昨日どこどこに行く子供さん集まりなさい』って来たって、石蹴ったでしょうって、誰も分からない。犯人探しみたいなことをしなきゃいけなくなるんですよ。なんでその場で注意してくれなかったんですか。学校でも、堀に石を蹴って入れなさいとは、指導しているわけではないんだから、たぶん子供は遊びとか、無意識でやったんでしょう。だから犯人探しみたいなことはできないし、したくないし、何とかそういうときには直接。近くで見たら、なぜ注意してくれなかったんですか」と言ったら、「分かりました。この電話はなかったことにしてください」って。俺、言うんだからね。誰でも構わない。そんなこともありました。これは余談ですけど。
　だから、昔はそんな少々のことで教育委員会に電話したり、学校に電話するなんかしなかったって。悪いことをして頭にこぶでかして、うちに帰ったら、できるだけ親に分からないようにしてるんだから。先生に、たたかれたんですから、親の顔に泥を塗ったって、親にまたたたかれるんだから。

―小さいころ何を食べていましたか？

杉本：食べ物は、麦ごはん。特に戦後だったので、お米なんていうのはほとんどなかった。農家の人なんかで、米を作っている人は食べられたかもしれないけど、私たちも小麦、大麦なんていうのは、作らされました。そのほかにサツマイモ、ジャガイモ、サトイモ。キュウリ、菜っ葉、ダイコンはみんなそうだな。食べ物は私どもそうだったけど、団子。小麦粉を作るから、石臼がうちにあったんだ。石臼って分かる？
　その石臼で粉をひいて、自家製でうどんを作ったり、それから団子を作ったり。今だと、ちぢみっていうの？　この薄っぺらな韓国で使うやつ。ニラとか何か入れて作るの。ちぢみのようなものも食べた。
　うちのおふくろなんかに作ってもらって、蕎麦も食べてた。でも本当の蕎麦ではないん

だ。私たちはマンガの粉ってよく言ったんだけど。そばがきだとか。

あと大麦作ったから、香煎(こうせん)なんかはおやつ代わりに食べた。香煎って大麦で作ったあれ。粉にしてそれをなめるんだ。(大麦の)粉のままでなめたりなんかもしたな。

あとは雑炊だな。つまり量を増やすために、ご飯に菜っ葉だとかサトイモだとかジャガイモだとか、そういうのを刻んで入れて。雑炊はいま言ったようにお汁物に入るけど、あとご飯にもいま言ったように、サツマご飯にしたり、ジャガイモ入れたり、豆を入れたりして量を増やして。もちろん麦ご飯も。とろろをなんていうのは。昔ヤマイモなんか幾らでもあったんで。あれも作ってたから。そういうものを食べて。よくおふくろの味って言うよね。

昔は、餅つきなんていうのは、俺のうちなんかは家族多かったからだけれども、朝の 2 時頃からやったんだ。(朝早いのは)いっぱいつくから。だって、午前中ぐらいまでかかったんだよ。あんこ餅、納豆餅、豆腐餅、クルミ、それから、ニンニク餅なんていうのもあったんだよな。

そして今度、草餅をついて。あと、しみ餅って分かる？　水に浸して、外にさらして、凍らして。ぱんかぱんかしてやるやつ。しみ餅。それと、今度、豆餅なんかもついてた。8 臼とか 9 臼とかって、9 時 10 時ごろまでついてたよ。それで、みんなうちでついたんだよ。臼と杵で。だからほとんど杵とか臼は、各うちにあったから。

私がおふくろの味っていうのは、正月のときに半円形のこういうやつ、きね餅っていうんだよな。鏡餅というのは丸いでしょう。これ、こういうふう(半月状)に長くなってやることを、きね餅って言うんだ。そのきね餅を、私のおふくろは、ごまを入れて、ちょっと塩を入れて薄く切って、それをからからに干して、それを油でジーとやってくれると煎餅ができるの。香りがいい。昔は冬になると西風でしょう。帰宅の途中まで来ると、油の香ばしい匂いというか香りが飛んでいくんだわ。走って帰ったもんだ。それが私が聞かれたらば、おふくろの味と。

だから今でも、餅菓子、揚げた餅は大好き。いつでもうちに置いてある。そんなのが、食べ物かなというところだと思います。

―いつ、どんな環境に生まれましたか？

杉本：昭和 16 年 8 月 13 日。生まれは富岡町上郡山。83 歳だよ。

きょうだいは 8 人いたんだけども、兄が 1 人亡くなって、7 人。私が、戸籍は四男、実際は三男、ゆくゆくは長男だから。ブリ(出世魚)でしょう。意味分かる？　戸籍は四男って、8 人いたうち 1 人亡くなったから、三男でしょう。一番上の兄貴が子供いなくて、養子になることになったから、一人っ子ですから長男でしょう。だから、戸籍は四男、実際は三男、ゆくゆくは長男と。でも養子縁組しないうちに兄は死んじまった。長男にならなかった。でも実際は長男と同じだ。兄貴の世話もしたからな。

―小中高はどこに通われていたのですか？

杉本：今で言うと富岡一小。元は富岡小、富岡中だったけどな。今は一小、一中になったから。高校は行った。小高工業。（通学手段は）電車でない、蒸気機関車だよ。昭和 33 から 35 年の頃だもん。

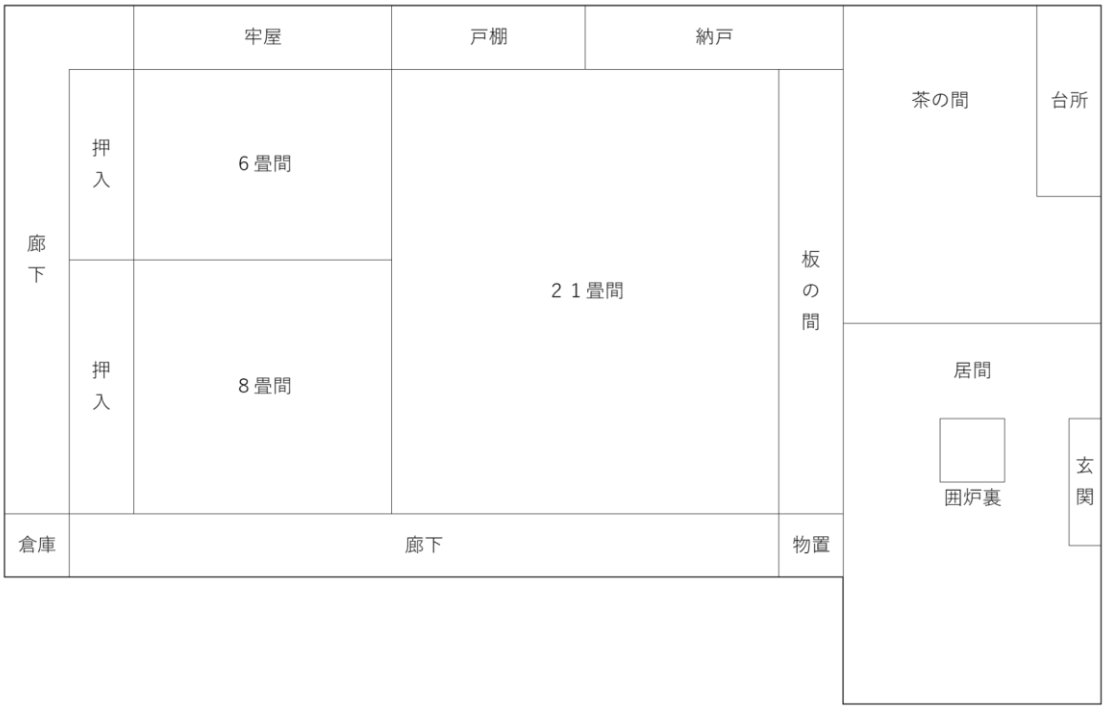
通ったのは三十三、四年か、高校は。おやじも亡くなったし、金もなかったし。だから就職するしかなかった。

皆さんそうやって大学まで出してもらってるんだから、金が余ってる親さんはいないでしょう。だから、一生懸命勉強して、親にちゃんと返すことを考えなきゃ駄目だよ。

―家の形状や、間取りはどのような感じでしたか？

杉本：おら家のうちは、8 間半かける 5 間半。

1 階だけだけど。ほんで、昔の陣屋を解体して持ってきた。清水って高台にあるんだけど、下のほうに上郡山というとこが。堀川さんというううちに陣屋があったんだって。ほんで、富岡町の過去帳にあったんだ。残存する建物では一番古い。それで今回の放射能被害で、壊すというときに、町の台帳に過去帳なんかに載ってたもんだから、これは簡単に壊せないということで、日大とか東北大辺りから来て、いろいろ。変なカメラで 360 度写るやつあるな。骨組みなんかみんな分かるやつ。そんなのをやったりなんかして、話していろいろ調べたんだけど。そしたら最終的には、改築しちゃったから。それで築年数から引かれちゃって駄目だということで。壊すときも屋根から全部、一本一本みんな外したんだけど、ずらっと並べてやったんだけど。だってあの天井なんか、みんなびっくりすっぺな。正目に 1 間おきに組んであるんだ。その間、ひもを通して、うちの中でブランコやったんだから。あと、かぎがあって。自在かぎね。それで、一斗の水の入る鉄瓶を吊るしたんだ。水 1 斗だよ。一升鉄瓶じゃなくて一斗の入る鉄瓶があったの。それでお湯沸かしたから、そのかぎに乗って遊んでたの。



間取り略図（推定）　インタビュー内容を基に編集者が作成

―朝起きてから学校へ行くまで、家事とかありましたか？

杉本：それはあった。兄弟多かったから、一番最初は庭はき。その次、廊下掃除。朝。寝坊なんかして、さっさとやってくると、おやじに「廊下掃除したか」、「した」、「うそつけ」。時間で分かるわけだ。おふくろが、「学校に遅れるから」って。「遅れたら別に構わないでおけ」って。慌ててうちに入ってきて上がってくると、それでうちの縁のほうで立って、「征男」、「はい」、「ちょっと来い」、「はい、何？」、「庭に行って、俺のげた見ろ」。入ってきたとき、だから、そろえておくと。今でもおらのうちに来たときには、全部そろえてるよ。そういう厳しい親だった。ほんでもいたずらをしたり、何かして。

―少年時代の思い出について教えてください。

杉本：少年時代。さっき言った遊びなんかも、思い出だな。あとあれやった。わなかけやったな。ゴンブジわなとかタカわなとか。鳥捕るの。ハトとかツグミとか。アカジとか。あとカスミ網で捕れたな、メジロやヤマガラ。ルールは知らなかったから捕れたの。ツグミなんていうのはいま渡り鳥で駄目だけど、罠で捕っていたな。

　あとは、空気銃持って歩いてな。ひと朝にハト７羽も捕ったら結構いいよ。こっちに来て鉄砲をやっていたんだ。たまたま派手になった。ハトを持って家に帰ったんだ。そうしたら子供に泣かれて。かわいそうと。ほんでやめてしまった。教育上はよくないべ。だって、子

供泣かせてはな。別に、ハト 1 羽 2 羽捕ったってどうってことないもの。そういうことがありました。

―おうちで農作業はされていたのですか？
杉本：農作業はやってない。いま言ったようにちっちゃいころやってた。春になればおふくろの種まいたやつを除草したり。中耕、例えば麦だったらば、土移動して踏むわけでしょう。麦踏みなんかやるわけでしょう。あとはオカボとか何か、全部、土を「さくりきる」というんだけれど、土寄せをしたんだな。そういうことをやりました。
　あとは、ちょうど今ごろだと、芋がら。分かる？　ずいき。あれを、皮をむいて一生懸命干すようになるの。干し柿を作るのに柿をもぎったり、そういうことはした。

―水泳や釣りはされていたのですか？
杉本：海は遠かったから。私が水泳ぎしたのは、沼だから。うちのほうに棚橋という沼があって。6 号線の道路のすぐ脇なんだ。
　海でも泳いだし、川でも泳いだよ。夏になると浸し針なんていって、大きいミミズを刺して、川にほうに行って、刺していくんだ。ウナギ。そういうのとか。夜、カンテラをつけて、魚をヤスで夜突き。昼間よりも、夜はうんと動きが散漫なの。それで、昼間深いところにいるやつが、浅瀬に来てたり。ウナギなんかは田んぼから川に、水が流れていくと、田んぼの水は温かいから、そういうとこに、こんなのがのろっとしてるんだ。そんなのも捕ってきたこともあるし。とにかく人のやることを何でもやった。

―中学校や高校の時の思い出は何ですか？
杉本：早くうちに帰りたかったから、クラブなんかやらなかったし、勉強なんかもやらなかったし。
　うちから駅までは自転車で行ったから。富岡から小高までは 45 分ぐらいかかったのかな。でも汽車の中なんか、毎朝勉強してたぞ。漢字の練習帳が渡されて、朝、紙に書き取りがあるんだよ。12 回あった。1 回だけ何だか駄目で、5 点引かれたのかな。満点取れなくて。

―他に高校の思い出はありますか？
杉本：（小高農工）高校で、工業科と農業科と家庭科とあの頃あったから、工業科の常任委員とか言われてやっていながら、生徒会で。近くの高校なんかは（卒業式が）1 日なのね。小高の場合は 3 月 10 日だったの。ところが、3 月いっぱいまで定期券を買って、10 日間しか学校に行かないんだから。ところが、3 日分の運賃で 1 カ月の定期券が買えるんだよ。そうすると、1 ヶ月定期券を買ったって、あと 20 日分ぶん投げてなくちゃならない。10 日間行く、何にも用事はないんだから、1 日か 2 日しか。あと卒業式だから。
　育英資金をもらったのが、おそらく福島県で一番先だと思う。たぶん俺が、発足して一番

早いかもしれない。おやじがいなかったから、その関係かもしれないけど。定期券を買うほどの金を使わなきゃならない。ほんで、卒業式を 3 月 1 日にして欲しいと、生徒会で指導部と話し合ったの。そうしたら、なるほどそうだなと言われた。ただ、伝統があると。だから「伝統とは何なんですか」と。1 日から 10 日まで何の授業も何もないのに、なんで 10 日まで、いま言ったように来るのには金がかかるし。たまたま俺は育英資金借りてたから。「私は家計が貧しくて困ってるんです。なんとかなりませんか」といったら、「じゃあ私だけでは決められないので、職員会にかけます」。それで、たまたま私達の前までは 3 月 10 日だったのが、私らのときから 3 月 1 日になった。だから、あのとき生徒会でやらなければ、たぶんもっと遅れたんでないかなと思う。高校時代、そんなことがありました。学生時代。楽しかった。

どこも楽しかった。世の中に出てから、もっと楽しい。この間のあれ、何だっけ、「エイジレス章」。

あの賞状の文句がいいんだ。「あなたは年齢にとらわれず、自らの能力と責任において、自由にいきいきと生活しておられます。それは内閣府が推奨するエイジレスの実践の模範であります。よってここにエイジレス章の盾を贈ります」、こう書いてある。自らの能力と責任において、自由にいきいきと生活していますと。俺の思うとおり生きてるんだもの。いいと思わねえ？　かっこいいよな。世の中が楽しくてしょうがないな。なんでかというと、大人になってもそうだけど、考えてみたら、人のやらない、やれないことを随分、経験してるんだよな。

―高校卒業後は何をされていたのですか？

杉本：私は家庭が貧しかったもんだから、(高校卒業後)いったん東京に就職したんだけど。

上の兄が、子供がいないのでうちに帰ってきてほしいとなったの。私が東京に行って、1 年目は仕事、2 年目に地理を覚えて、3 年目に金をためて、4 年目から学校（大学）に行こうと思ってたの。そうしたら、うちに帰ってこいと、こういう話になったので、信頼のできる先輩に相談してみたの。

そうしたら、たまたま二人とも偶然に、「スギちゃんよ、大学出るまでは 5 年かかるぞ。しかも夜学だぞ。1 期生ならまだしも。その大学を出たって、大きい声でいばることもできないんじゃないかと思うよ。それよりは、田舎に帰るんだったら、この 5 年間の実績をつくったほうがいいんでないの？」、「なるほどそう言われればそうだな。都会で暮らすんでないんだから」と思って、「よし、じゃあ帰ろう」と思って帰ってきたら、たまたま学校事務職員の試験があった。それを受けたら当たっちゃったの。それで、その学校事務職員というのを、昭和 39 年 4 月 1 日から始まったんだけれども。さっき言った、自由でいきいきと。どこへ行ってもこれをやってた。

それで、なかなか経験できないことがあって、昭和 44・5 年頃かに、組合の研究大会で、職場の民主化ということで、研究発表に出ろと言われて、たまたま県大会に行ったら、これ

はもったいないから全国大会に出せということになって、大分県の別府まで行ったの。それで発表をやって、それで帰ろうと思ったら台風 18 号で、船も飛行機も飛ばないよって。旅館で 1 日延期して、それで帰ってきて。そういうこともあったし。

あとは、夏休み、中学校で合唱コンクールがあったの。あのころ双葉郡では 16 校、中学校ではあったんだ。それで、大会 1 週間前に、音楽の先生が産休に入ると。私は学校の事務屋だから、配置とか何かのことも分かってるわけだ。それで校長先生から呼ばれたの。「杉本君、相談があるんだけど」、「何でしょうか」、「分かってるように、音楽の担任が来ないので、1 週間しかないから、いろいろ考えた結果、あんたに 1 週間指揮を執って郡の音楽コンクールに参加してもらいたい」と。中学校（の教員は）、つまり専門家だから。それから校長さんに言ったの。「私は行政職、事務職員ですよ。教員が二十何名いるのに、そんなことはできません」、とっとと帰ってきた。

そしてその日、そのまま帰ったら、次の日の 3 時過ぎになって校長先生から「杉本君」とまた呼ばれたの。「校長室へ、ちょっと」と。「まあ、かけろ」と。「実は昨日のことなんだけど」、「昨日のこと、話はしたでしょう」、「もう一度だけ聞いてくれろ」。聞いてくれというので聞きました。

そうしたら、「確かに君の言うとおりだ」と。ところが君が帰ったあと、昨日教頭とか教務といろいろ相談したんだけど、とにかく私たちの学校の先生方は、誰もできないと。じゃあどうする。「生徒をこのままにはできない。」、「杉本ならばできる」と、こういう話だったんだって。だから、校長さんの責任で杉本を説得してほしいと言われたって。私自身小学校、中学校の合唱コンクールとか行ってたから、結構、思い出になる。子供を投げてもかわいそうだな。だから、「校長先生、条件を飲みますか？」と聞いたら「何だ」って言うから、「何だじゃなくて、飲むか飲まないか、返事が先でしょう」と。

そうしたら、「よし、聞く」。「じゃあ、先生方の総意だと言うならば、1 週間やりましょう。私の好きなようにやっていいですか」、「いいです」。「当日会場に行って、歌を歌うまでやりますから、途中で駄目なら、それでやめてもいいですか」と言ったらば「構わない」と。校長さんの腹もでかいんだ。「とにかく 1 週間子供と練習をさせて、登壇までさせてもらえばそれでいいと。あとは責任は俺が取るから」。「じゃあ分かりました」。その日からやったんだ、1 週間。コンクール当日、プログラムでナンバー 1 だもの。1 番バッター。

「登壇だよ」と。「先生どきどきした」、「おい、ちょっと止まれ。こういふうに、人って書け」って。分かる？　「人って書け」と。「はい」、「人を飲むっていうんだ。力むこともねえし、上がることもねえ。昨日までのとおりやればいいんだから」で、歌って。「郡山の県大会に行くんだんべ」と言ったら、「行く」。「よし。であればそのつもりでやりましょうね」。そして終わって。

そうしたら、前にいた小学校の先生なんかも来て、いるんだ。「杉本さん、よかったよ」って。産休の先生が、こんな腹大きくして、そして「よかったよ。私よりうまかったよ」、なんて言ってるの。

そうして（発表が終わり）、担当者残れというわけだ。全部終わってから県大会出場校の発表か何かあるから。それでやったら、2 校郡山に行ってもらいますので残れと。16 校あるから「プログラムナンバー1、それからナンバー14」、「あの、すみません、もう一回」。「君、学校どこだ」、「広野中学」、「何番目だ」、「1 番目でした」、「郡山、郡山行くんだ」。誰だか知らねえけど、名前も知らねえ音楽の人に。そして県大会への出場が決まったんだ。

そうして中学校に帰っていったら、先生が皆で、わーっと。何だといったら、「やっぱり杉本先生でなきゃできねえ」、「歌ったのは子供だ。褒めんなら子供を褒めろ」って。だって俺からしたらば、みなさん(教員)がやんねきゃなんねえことを。

「やっぱり杉本さんでなきゃ駄目だ」なんて、「何言ってんだ。褒めるんなら子供を褒めろ」って、言ったけども、校長さんは「杉本君、すまなかった」なんて言ったけど。そんな思い出があった。

―いつごろ大熊に移ったんですか？

杉本：これは、結婚すると同時に。(昭和)44 年に結婚したんだけど、それがうちの、いま家内と言うと怒られるんだよな。妻と言わなきゃなんない。うちの妻が、年老いた父親しかいなかったの。小学校 2 年から母親が亡くなっていないんだ。ほんで、昔は嫁にくれるなんて言ったけど、嫁に来てしまうと、年寄りの父親が独りになってしまうから、「悪いけどしばらくの間、面倒を見てくれないか」ということになって、私が大熊に行った。(昭和）44 年の 5 月 7 日から大熊町民ということです。

―大熊町と富岡町の違いは何ですか

杉本：大熊と富岡の違いで一番歴然としてるのは、原発は同じか。でも大熊町に原発が来たのはずっと早いから。

富岡町の違いというのは、富岡というのは、昔から役所町なんだ。双葉郡。今は浪江のほうが多くなったけど、富岡には国とか県の役所というのはいっぱいあったから。

ただ違うのは、ずっと昔から大熊には夫沢って、飛行場というのがあったよな。軍事関係のものがあって。あとは、塩たきなんかも、富岡でも海でやっていたんだよ。土釜で。大きな高いのを作って。特にこんなやつだ。鉄板で造った大きい箱があって。海に行ってこうやって塩水をくんできて、とことこ上がっていってザッとあけて。どんどん。杭木といって、石炭の炭杭の杭。松の木を使ったんだ。その枝が出るわけだ。松っぱ。その枝を馬車に積んで、海岸まで運んでいって、海の水を煮詰めて。塩を造るわけ。

だから、夏に盆踊りやるのも一緒だし。観音さまのあれもあって、盆踊りなんかもやって行ったし。あとは、違いっていったって、何かある……。

あんまりよく分かんないな。夫沢のほうは、どっちかというと田んぼはあったわな。うち

のほうは山が多いんだ。長者原とか何かというのは。夫沢というのは。だから、地主さまなんかもいたわけでしょう。うちのほうは、それはなかった。古い湯屋なんかはあったけど、湯治場。

玉の湯は大熊。富岡は鶴屋とか、梅田屋とか。鶴屋は鳥の鶴。うめだやは梅の田んぼ、梅田屋。これは、いわゆる鉱泉だ。温泉ではない。沸かし湯。夫沢にはそういうのはなかった。夫沢も古いおうちがいっぱいあるから。特に1区はそういうイメージ。

よく分かんないな、夫沢のことは。いま言ったように、昔からある盆踊りとか何かやってるのあったり、お祭りのときなんかは、うちの家内の父上なんかは、小高の辺まで行ったって言ったから。

―今までどの学校に勤めていらっしゃったのですか

杉本：富岡二中、川内中、広野中、大野小、富岡一小、熊町小、川内二小、双葉南小、熊町小。のべ9校。

それで面白いのは、管理職の数がすごいんだ。38年で、校長さんが延べ19人かな。教頭さんが22人。やってみっせ。38年で、22人と19人と。何人もいないから。大野小学校のときには6年間で、教頭さんが6人。こんなことは普通ないんだから。

逆に俺、褒められたんだよ。たまたま「杉本君、よく頑張ってんな」って。「はあ」って言ったら、毎年毎年、5人も6人も教頭が替わるのに、よく事故も何も起こさないでやってる。杉本たいしたもんだなって。

【第2回インタビュー】

―シルバーセンターの内容と、退職後から震災まで、どんなことをしていたかお聞かせください。

杉本：「シルバー人材センター」という。北双広域シルバー人材センター大熊支所。というのは、浪江と双葉と大熊の3町の並立というのか、そういう組織で。本所が浪江にあって、双葉と大熊は支所だったんです。

ということで、もう4月1日から。シルバー人材センターで、1年間は所長見習い。2年目から、2、3、4と、所長になったので、所長になると64歳が定年なんですよね。だから、（平成）17年で終わるはずなんですが、跡継ぎがいないということで、「もう1年お願いしたい。ただし、年齢超過してるので、所長扱いとするけれども、給料は臨時職員並みだよ」という。

それで5年目、65歳になる年。64歳過ぎた3月で普通は終わりなんだけれども、65歳になる4月1日から臨時で勤めたんです。所長ということで。そしたらその年、理事長が代わった。そうしたら、事務所に来て話聞いたら、「予算が足りないので、今年いっぱいというわけだったけど、半年で辞めてくれないか」。つまり前期。「はい、分かりました」。

それで、9月の末になっても後任者の連絡がないので、事務所に話したところが、もう1

カ月やってくれということになったの。ほんで、私もちょっと心乱れて、理事長なんかに「いくら何でもやり方がひどいんじゃないですか？」というような話をしたんですけれども。「とにかくあと 1 カ月。9 月いっぱいで終わるんだけれども、10 月いっぱいだけ何とか頼む。あとは必ず見つける」ということで、だから 10 月まで 7 カ月間。（平成）18 年度、やったのが、シルバー人材センターの流れです。会員は六十五、六人いたのかな。それで職種によって振り分けをして。

震災までの 4 年間は、趣味に。趣味っていうのは、私はいっぱい趣味があって、スポーツとか趣味とか楽しんでいたんだけれども、また仕事がだんだん増えてきて。仕事っちゅうか、ボランティアっちゅうか、そういうのが、頼まれ仕事が出てきて、だんだん忙しくなってきたんだ。

―趣味は何ですか。

杉本：スポーツはソフトボール。ソフトボールをやったし、卓球クラブなんていうのもつくって。ラージボールというのがあって。それから、皆さんは分かんないんだと思うけど、8 人制バレーボールというのがあったの。柔らかいボールで、農家のお母さんたちが腰を伸ばすためにつくられたバレーボール。だから、スパイクなんかはなしなんだ。変則的なものなんだけど、そんなののコーチなんちゅうことになるんだ。ちょっとおこがましいけど。そんなことをやったり。

それで、スポ少をやった。スポ少のソフトボール。球拾いでねえぞ。スポ少の指導者だぞ。スポーツ少年団というのは、資格ないとできないんだから。スポーツ少年団というのは、スポーツやることだけじゃないんだ。スポーツを通して社会貢献とか、団体生活とか、そういうのを覚えるのがスポーツ少年団だから。ところがみんな、球技とか勝負のことばかり本気になってやってっけど、あれは本来からは外れるの。あくまでも団体の生活を覚えたり、奉仕を覚えたり、そういうのがスポーツ少年団。その指導もしたし、さっき言った変則バレーボールのコーチなんかもしたし。今度、自分ができなくなったら、大人のソフトボールの審判もやったし。

ソフトボールは、ちゃんと審判は、試験受けてやらなきゃならないもの。3 種というのは県内でできる試合。2 種というのはブロックだから、私の場合は東北ブロックにいるから、県大会、青森で東北大会やるっていうと、行って審判もできるから。1 種になると全国規模になる。その中から優秀な人が、国体の審判やったり、あるいは世界に、ソフトボール大会に行ったり。

私は 2 種で終わった。福島県で国体あったときに取ろうかなと思ったら、1 年間に審判に 60 回以上出なきゃならない。4 月から 11 月までだからね。冬期間はないから。日曜日、土曜日と取っても、1 月、2 月はないから、4、5、6、7、8、9 と 11。日曜日 4 回あるから、何度？　6 カ月あったって 24 回でしょう。足りない。夏休みにもある。土曜日もある。ほんで、年間 60 回は試合会場に来ないと駄目だぞ。消化しないと、俺、欠席で、降ろされちまう

から。それで、審判を取ろうかと思ったんだけれども、「杉本さん、年間 60 回だぞ」、「60 回、ちょっと待ってよ。とてもとても。諦めた」って。私は 2 種しかないんだけど、中体連とか、地域のソフトボール大会、郡大会とか何かには、結構、参加をさせてもらいました。

―頼まれ仕事というのはどのような仕事ですか。

杉本：頼まれ仕事、いいか、言ってみっか？　やってた仕事。大熊町地域包括支援センター運営協議会委員、大熊町介護保険運営協議会委員、町社会福祉協議会理事、福寿会理事、福寿会というのは特養関係の。それから、町福祉計画推進協議会委員、町地域福祉活動計画策定委員、夫沢 1 区行政区長、同じく墓地管理者、それからこれ、環境省との補償関係で、認可地縁団体の代表、夫沢パークゴルフふれあい会というのがあって、その会長をお願いって言われて、またやらせられて。俺やらないって言ったのに。それから今度は老人クラブで。老人クラブは行政区、夫沢 1 区の老人クラブ会長、大熊町の連合会の会長、双葉郡連絡協議会の会長、県の理事と、老人クラブだけで四つ。それから、ふるさとおおくま会、水流短歌会って。県退職教職員協議会双葉支部。それから、県退職教職員互助会双葉支部代表世話人、交通安全協会大熊分会ならびに富岡地区交通安全協会。このうちなくなったのが、老人クラブ会長なくなった。それと、社会福祉協議会理事がなくなった。あと区長がなくなった。墓地管理なくなった。認可地縁団体。でもまだ十ぐらいあるんだ、これ。

―震災が起きたときは何をやっていましたか。

杉本：その日はパークゴルフ協会の練習日だったの。私の妻が、ちょっとアルバイトをしてたんだ。もちろん退職してだよ。それで、仕事で午前中、帰らなかったもんだから。協会の練習は午前中だからできない、帰ってごはん食べてから、「今日練習って午前行かなかったから、行ってくっか」って、2 人で行ったの。車に乗って 15 分、もう。近かったから。そうして、一通り 4 コース回って、2 時頃だったのか。2 時 46 分だもんな。　「2 時だ。じゃあそろそろうちに帰って、水戸黄門でも見ようか」って、その頃 2 時半だか 3 時から、水戸黄門をテレビでやってた。それで、「そうだな」って言ってるうちに、ぐらぐらっと始まった。ほんで、最初は立ってるのがだんだんつらくなったから、私はこうつかまった。うちの妻もつかまった。がーんと来たもんだから、1 回目。私はしがみ付いた。そしたら、うちの妻は四つんばいになっちゃったんだ。そばにもう一人、うちの近くの人なんだけど、「俺は若いから大丈夫だ」って。あそこにちっちゃいため池があるんだよ。そこのフェンスがだーんと倒れる、水がぐわんぐわん、池のまわりのブロックがガタガタって崩れてく、目の前の道路やコースがばりっと割れていく。

　そのうち、休憩室があったんだけど、スコアの集計なんかやったり、ごはん食べてお茶飲んだり。そこんとこが、ガチャンガチャンって音がしたんだよ。何だろうなと思ったけども、動こうにも動けない。真っすぐの木が、こういうふうになるんだな。経験ないだろうな。こういうふうに見えるんだよ、木がお互いに。フェンスがこんなんなって、そのうち崩

れていく。ブロックの護岸が、それが崩れていくわ、水はぐわんぐわんなるわ、いま言ったようにばりっと目の前が割れていくわ、ドンドン音はするわ。

静まって帰ろうと思ったら、音がしたのはジュースの自販機が。それが動いてはガターン、動いてはガターン、結局ドア突き破って、機械がはみ出てた。そして、「おしだ」って、大八。あの店の土台なんか、なんぼ、30センチぐらい差が付いたかな。コースの中、ざーっと地割れしてるし。アスファルトも持ち上がるし。

それで、うちに帰った。そうしたらもう、屋根の瓦は落ちてるし。軽トラックで行ったから、帰る途中も、道路がこんな持ち上がって、普通の道路帰れなくて山道帰ったんだけど。

片づけをしていたら、町の防災無線だな、「体育館に避難しなさい」となった。すぐ行って。吹っ飛んで行った。そうしたら、誰もいねえんだ。たまたま体育館の所長が出てきたんで、「なんだ、集まれっていったけど、集まってどうすんだ」っていったら、「確認、無事確認すればいいんでねえのかな」なんて。「じゃあ俺、確認したべ、俺は無事だからな」って。「はい、分かりました」って。ほんで帰った。

そのとき薄暗かったからね。これは電灯も、うちの中もがちゃがちゃだから駄目だから。あそこにローソンがあったんだ、道路の所に。ほんで、ローソンに寄って、晩ご飯とお茶を買って、うちに帰って、もう部屋の中もぐちゃぐちゃだし、余震が絶えず来て危ないから、「今晩は駄目だな、じゃあ車で寝よう」ってことで、うちの中に靴のまま入っていって、毛布を2、3枚出して、車の中でごはん食べてたら、今度、消防車がウワーンといって、「大至急、中学校に避難してください」っていうあれだったの。さっきは体育館。今度、中学校に避難しなさいって言われたので、「じゃあ行かなきゃなんねえな」っていうことで。そのときはごはん食べたばかりだったから。

それで、行ったら校庭が車でいっぱいなの。ほんで大熊中学校の所には、ロータリーがあるから、そこんとこに消防車とかパトカーなんか、いっぱい止まってて、中に行けないんだ。そのそばのとこに車を止めて、体育館の中も人でいっぱいのようだからっていうんで、「車で過ごすしかないな」と、その日は車の中で過ごした。だから、ロータリーの脇の空いてる所で。ほんで一晩明かしたな。寒くてな。本当に寒かったんだけど、星のきれいな夜だった。晴れてた。星がうんときれいだった。

一晩、俺は警察とか消防があの辺を行き来してたもんだから、眠ることもできないで、朝になったら消防の人が来て、「今からバスが来ますから、バスに乗ってください」。「バスに乗ってどこ行くんだ」って言ったら「都路へ行くんです」って。都路のどこかっていったら、「いや、都路方面としか言われてないんです」、消防の人が。若い人が。その時うちの妻が、「都路とか、バス来るとかって、いったい何のことなの？」ってこうなったわけ。ああ、それは分かんないけれども、これ(放射能漏れ)でないかなと。

だから、避難っていうことじゃないのかなって話をしたら、「困ったな」、医者から血圧の薬もらってんだ。それで「必ず毎日飲みなさいよって言われたので、薬だけでも取りにいけないかな」って話になったの。

それでたまたま、ちょっと階級の上の人に「今、バスで行けっちゅうけど、うちの妻が、高血圧でほれ、毎日飲めって言われている薬を取りに行きてえんだ」って言ったら、「バス来るんですけど」っていう。「とにかく、うちに行って薬だけ持ってすぐ戻るから、そんときにバスがいれば乗る。もしバスがいなかったら車で行くってことでいいか？」とこう言ったらば、「いいです」。ほんでうちの妻が、薬を持つと同時に、私はキャッシュカードと、携帯ラジオを持ってきたの。

それで戻ってきたら、もうバスなんかいるわけねえわな。みんな先を争って乗るんだから。ほんで、たまたま1台だけ向こうから来た。「バス止めてくれよ。その列の中に俺のこと入れてくれ」って、なんでかというと、バスなら大勢だから、変なところには行かないだろうと。バスの後ろへ付けたらば何かいいんじゃないかと、瞬間、考えたんだな、俺。俺にしてはいいこと考えたな。

そうしたら都路を通り越して、常葉町の体育館に入ったんだよ。それで、行ったらば、「あ、杉本さんこっちこっち」って、常葉体育館にお世話になった。それが12日の朝。とにかく車がのろのろしか走んないから、ざーっとつながったままだから。10時頃でないかな。だって、朝6時頃だもの、バス来るから乗りなさいと言ったの。うちに行って薬を持ってきたから。それで、常葉体育館に落ち着くことになったの。それが3月12日の午前中でしょう。あそこは、体育館も四つに区切ってあって、それで布団なんかも敷いてあって、うんとよかった。衣類なんかは、若い奥さんなんか、こうやって抱えて持ってくるんだから。「よかったら着てください」とか何とか。差し入れだ。常葉町の人。それで、うちの妻なんか、パーマ屋さんに行って、カツ丼ごちそうになってきたっていうんだから。「何だ」っていって聞いたら、昔、常葉は大火、大きな火事があったんだって。そのとき大熊から応援に行ったのか、何か物資か何か届けたのかな。

15日か16日の午後になったら、当時の小入野区長が「杉本さん」、「これ」って、マイクロホンをよこしたの。「これ、頼む」って。「何だい」って言ったら、「これから会津に行かなくちゃならないから、これ、頼む」。「頼むって言われたって、俺も困ったな」って言ったら、役場の若い人いて、「杉本さん、お願いします」。で、その日から朝昼晩、朝昼晩と、マイクロホンで連絡をさせられた。体育館を四つに区切って、1班、2班、3班、4班と決めて。例えば常葉町から差し入れがあるなんていうときには、じゃあ、各班から女性2人ずつ出してくださいとか、そういうことを連絡した。役場の連絡事項までするんだ。「そんなの役場職員の仕事だ」って言ったら「お願いします」と。

それで朝昼晩、朝昼晩とやって。困ったのは朝昼晩の食事、まず菓子パンなんだよな。ジャムとかクリームとか入った、甘いの。それが3日ぐらい続くんだ。そうすると、大人っては失礼だけれども、毎食甘いパンは、駄目なんだよな。そうすると、食べきれないから残る。それを返すというと、「駄目だ」って。「なんでですか？」、あのころ体育館にいたのは、多くて120人くらいかな。そうすると、例えば30人返すと、次の日は90人分しか来ないんだと。「要らないんですね」と。だから、もらっといてくれよと。八つだか九つぐらい

たまるんだ、ここに。ここって、枕元だ。戸棚もないから、ベッドの脇のとこに。
それで「どうすればいいんですか」と言ったらば、困るんだな。そして役場に行ってみたら、ラーメンなんかが箱に何段も積んであるんだ。「パンだけでなく、そのラーメン食わせろ」と言ったら、「杉本さん、これはまだ日にちがあるんだ」って。賞味期限が。パンは賞味期限がないから早く食べないと駄目なんだ。ほんで、「残ったパンはどうすればいいんだ」と言ったら、処分するしかねえ。「投棄するんですか」と言ったら、「いや、どういうふうにするかは分かりません。とにかく、私たちの分からないところで」。
あとは、食事をもらうのに、段ボールを破いて持ってくるんだ、こんなちっちゃい子供が。あの避難のアフリカとか何かのことは、テレビで見てるでしょう？　本当だ。ちっちゃい子供。あるときに、シチューが出たんだ。寒かったから。これ、こんな段ボール破けたのにシチュー乗っけて、パン乗っけて、バナナこんなちっちゃいのを乗っけて、ちっちゃい子供……。よし。「今日は、シチューが出ます。小さい子供さんもいるので、もし手なんかにかかったら、医者もいないし、遠いし、車もないわけだから。なので、大変申し訳ないけども、先にシチューだけをもらってくれませんか。2回目にパンをもらってください。いろいろご厄介かけますけれど、お願いします。よろしいでしょうか」と言ったら、誰も文句言わないで、ちゃんとシチューだけ運んで、2回目も回って。
4月3日の朝までいたのかな。その間にお掃除をしたり。4月3日に、全部掃除をして、会津地方に分散して行ったの。全部。その間に、洗濯場が小さいとか、洗濯機が足りないとか、いろいろあった。食事なんかも今日は1班から行ったら次の日は2班、3班というふうに、ぐるぐる回して。食料品なんか余る。果物なんか。まず子供、その次じいちゃん、ばあちゃん。それでも余ったらば、基本的には今日は2班だったら2班で片付ける。例えばバナナが残ったっていったら、その中で子供、お年寄りを優先して分けてください。それで余ったら今度は3班に。そんなふうにして。誰も文句出なかったぞ。一件のトラブルもなかった。あれは有り難かったな。
私は毎朝体操した。ラジオ体操、見ている人はたばこ吸いながら。「ラジオ体操か」、「おまえもやれ」、「いや、そんなの」なんて。でも最後には、26人ぐらいやったからな。常葉体育館の、雪降った中で体操やってるの。俺のラジオ持ってって、ラジオでやってたから。
そしてあそこ、一つ思い出があるのは、体育館で雪降ってて、夜中に5カ所ぐらいストーブたいてたんだ、暖房のために。そして表玄関はドアが、風吹くとこんなになったりして、雪なんか吹き込んでた。2時頃だと思うんだけど、たまたまトイレに行ったら、ドアの手前にもこっとしたのが見えるんだよ。「誰だ」って言ったらば、県から派遣で来てる、県職員だっていうの。玄関のところで1人、夜の番してるわけだ。雪降ったから、ロビーだもの、寒いわ。そこで役場の人のとこ行ったら、「何ですか」って言うから、ストーブを1台余ってたの分かったから、「灯油持って来て」と言ったらば、「灯油は限りがあるんです」と。「そんなこといいから、持ってこい」って。「何するんですか」って。「だから、足りなく

なる」って。「足りなくなったら、中で使っているうち1台を消せば良い。五つあるうち、一つ消せば四つになるから。こっちは我慢できるから、持ってこい」って言ったら、持ってきた。それを入れて、玄関にストーブたいてやった。喜んでな。だって、毛布かぶって雪の中、こうやって1枚でいるんだもの。寒いべ、夜通し。夜中2時だよ。俺は強い、毎日これ放送やってんだもの。人の世話もまんざら悪いものでは。そんなことあったな。

あとはみんなで3日4日前に、まわりのごみ広いやったり。お世話になったから。そんなことやって、会津に行ったんです。それが初めの頃。

あと会津に行ったら、会津でもこれまたいろんなことある。会津に行っても、会津（の避難先のホテル）は4階まであったんだから。4階まで入ったんだ、びしっと。380人ぐらいいたのか？　一番多いとき。それでもいろいろあったぞ。本当に社会の縮図だからね。たまたま私はいろんな立場でいろんなことをやらされていたから、よかったけど。面白い話あるよ。

フキノトウの話。春になって、雪かきをするでしょう。そうすると、今日雪かいたら、3日目にはフキノトウ出てくるんだ、こういうふうになって。3日だよ。出てくるの。それを採ってて、頭のいい人は、4月初めの頃だから、山菜なんか、ばあちゃん売ってんだ、ワラビとか何か。そこに持っていって、天ぷらしてもらってきた。「杉本さんこれ食ってみろ」、「なんだこれ、フキノトウだんべ」って言ったら、「んだ」。「どこにあった」、「内緒だぞ、内緒。あそこ行って、角の所にばあちゃんいっぺよ」、「うん」、「天ぷら頼んできたんだ」。そんな人もいるし。猪苗代まで行って、刺身買ってきたなんて。「杉本さん、これ、食え」なんて、ごちそうになったのもあったけど、そんな人もいて。

そうかと思うと、「ごはんうまくねえ」、皿ごとぶん投げたりな。ホテルの食事。「うまくねえ、こんなの食わんねえ」って。あの支配人偉かったな。それでも怒りもしなかったもんな。「いや、確かに私も食べてみましたが、確かにまずいと思います」と言っていた。

自治会で。とにかく4月の3日に行って、6日にはもう全体会やったんだから。3日目か4日目なんだな。避難してる中にいたのが、熊町の区長さん。区長さんは彼だけでなかったのかな。そうしたある日、横になってたら、ノックするから「はい」って。そうしたら、「杉本さん、頼みたいことあるんだ」、「何だい」、「役場の人が来て、人数こんなにいるんだから、自治会つくれって来たんだ」って。「俺、やったことないから、杉本さんに頼みに来たんだ」って言う。「やったことないって、区長を今やってんだもの、できっぺ」って言ったら。「自治会なんてやったことなかったから、分かんねえから、頼む」って。「俺も困ったな、何とか引き受けてくんねえか」ということになったんだよな。「じゃあ、親方はあんただな。俺は事務局でやるから。会長はあんただよ」って。

「副会長には、女性入れるよ。そして私が事務局でいいか？」って。「あとは、役員は段階付けないと」っていうわけ。1階の部長だとか、2階の係長とか、そういうのを付けないと。ほんで、各階から何人か集まってもらってってということで、全体集まってもらって、「こういうふうにしたいって役場からあったので」って。そうして、各階から何名か出して

もらって、その人たちを役員にお願いして、連絡員という形にして、それで役員会開いて。そして事務局杉本の形でスタートしたんだ。そして毎朝3役で、ミーティングやった。それで、必要があるときには、今度は食堂の入り口にホワイトボードがあったから、そこに連絡事項を書いて、あと全体会もやれるときには全体会もやって。

またいろいろ面白いことは、洗濯機でいったら、「いつ行っても満杯でできない」って。「何とかしてくれ」ってなったので、まず時間を決めた。「6時前は駄目」って。6時になって行ってみると、また洗濯物がいっぱいあるっていうんだよ。通せんぼしてもらった。ホテルに言って、ドア閉めてもらった。それでも荷物あるっていうんだ。何だって言ったら、電灯消した暗い階段、泥棒みたいなとこをやっている人がいるわけだ。それでやっぱり駄目だって。

よしということで、じゃあ1階、2階、3階というふうに、機械を決めましょうと。そうして行ってみたら、俺、2階の番で行ってみたら1階の人使ってたと、こうなった。あるいは2階の人行ったらば、3階の人やってたって。それで聞いてみたら、「空いてんの使ってどこ悪いんだ」って。なるほどな。でもそれは駄目だべってことになって、「3時まではどこの台でも、ほかの階の台は使ってはいけない。3時以降だったらば、1階の人が3階の分を使ったり、2階の人が4階のやつを、空いてれば使ってもいい」。

それから今度は、風呂。朝、お掃除終わればいつでも入れるわけだ。「一人で入ったときに、何かあったら困りますので、4時からというふうに決めてもらえませんか？」という、支配人から。毎週土曜日に支配人と自治会と、打ち合わせしたのね。支配人からの話もあり、われわれも、いま言ったように時間を決めてもらったり、それからドア閉めてもらったりしたんだけど、ほんでも駄目だ。

たまたま「4時まで駄目だ、4時からだ」ということで、全体会持って「入浴は4時からお願いします」。3日ぐらいしたら、「杉本さん。4時になったから行ってみると、もう出てくる人いるんだよ」。「教えてやったらいいべ」、「教えた」、「何を教えたんだ」、「4時からでないの？」と言ったら、「そうだよ」。「なんで早く入ったの？」、「だって暇だもの」って。退屈だから入ったんだって。「だから、もう一度よく時間を見て、4時になったの確認してから入っていただきたいんです。それは私でなくて、ホテルからの話ですよ」ということで。そうすると、やっぱり入らなくなるんだ。そうしたら、「杉本さん、大変だな」って。「子供なら叱ればいいけど、大人は叱ると反発するんだよな。だからしょうがなくて、時計間違うなって言って、気を使うな」なんて、俺に同情してくれた人もいたけど。そんなこともあった。

そんで、支配人へ最後にお別れのあいさつをしたときに、「私はうんと助かったんです。よかったんです」って言うから、何だっていったら、避難しているホテルなんかの、支配人などが集まって会議かなんかあったんだな。それでやっぱりずいぶん苦情なんかもあったけど、私は皆さんがやってくれたおかげで……皆さんというのは自治会だべ。自治会がやってくれたおかげで何の苦労もしない。だって言いたいことも全部言うわけだから。週に1回持

ってるから。それでできる範囲で協力をしましょうと。

例えば毎日朝晩と、ごはんの印付けたんだ。朝飯食べに来た人。夕飯食べる人。これ、ホテルでやってたわけ。ある日支配人のほうから、「これ（人数確認）、ホテルでやってるんですけど、皆さんでやってもらったほうが、より親しみわいて、朝も見れるしいいんじゃないでしょうか」っていう話になって、じゃあ引き受けましょうということで、これ、全体会で了承したんだけど、たまたまその会議にいなかったんだな。「てめえら、俺のこと監視してんのか」って。

また全体会だ。単身の方もいます。病弱の方もおります。朝も来なかった。ちょっと具合でも悪いんだろうか、夕飯も来なかった。たまたま次の朝も来なかった。何かあるんでねえかな。これで初めて分かるんですよって。私たちは監視ではなくて、皆さんを少しでもお守りするという意味ですので、決して監視なんかじゃありませんので、ご了承ください。それでも駄目だって言われたので、じゃ、あっちのホテルに行ったと話したら、「行く」って。奥さんと 2 人でいたわけだから、で、奥さんに、旦那さんいなくなって困ったべって。「せいせいしていい」って。そんな笑い話もある。

そうかと思うと、もう一つ面白い話だったのは、「杉本さん、うちではカラオケ大会、いつやるんだい？」、「カラオケ大会、面白いな、これ何だ？」って言ったら、隣のホテルでやったんだよって。「隣のホテルでやった？」、「そうだよ。うちはいつやるの？」「待ってよ、聞いてから出すから」。隣の自治会の会長曰く、「猪苗代にカラオケ教室に行って歌ってきた話だべ」って。間違いねえのかって言ったら、「俺が言うんだもの、間違いねえ」、「分かった」って。そしたら、「杉本さん、この間の話、どうしたの？」って言うから、「もう一回、どんな形でやったか聞いてきてくれる？」って、そのまま何もなくなっちゃった。かっこ悪いから来なくなった。

でも、7 月の 10 日になったらば、仮設へ移れるようになったから、それで 7 月の 2 日だか 3 日に支配人に、「カラオケ貸してください」って言ったら、どうぞって。ほれで、朝 9 時から午後 3 時までぶっ通し。そうすると、ほとんどマイク休まないで歌ってたぞ。ほれで最後にみんなで手を組んで、お互いに。お互いに手を組んで、『星影のワルツ』を歌いながらやったら、涙こぼしてな。そんな人もいたな。面白いこと、いろいろやった。

あとは、面白かったのは犬。われわれ、どんどんあとになって入ってくる人は面接したのね。どんなことを希望してるんだか、部屋は 3 階以下とか、そういうこともあったから。希望とか何かありますかっちゅうことで話をした。名前も分かんねえ、男か女かも分かんねえではちょっとまずいから、ホテルはそこまではやらないからね。

そしたら、たまたま犬を連れてきた人がいるんだよ。「犬はだめです」と言ったら、「役場でいいって言うのに、なんでおめえらがそんなこと言うんだ」ということになって、役場に聞いたらば、役場の人はたまたま臨時の若い女性の方で、ホテルに電話したらしいのな。ホテルでは犬、ネコ連れてきてもいい一般客の部屋があるから、大丈夫ですよって。避難者っていうことを確認しないで返事したんだな。だから、犬を連れてきた。「そういうわけだ

から、役場で何とかして欲しいと」って。「はい、分かりました」って。ちゃんと納得したわいな。役場でその臨時の女の人が避難民だっていうことを分かんないで言っちゃったのでっていうことを謝ったんだべな。こっちで謝まらなくとも、役場とホテルの話だから。そんなことで、喜怒哀楽、いろいろ経験してきました。

4月3日にホテルに入って、本当は6月いっぱいだけだったんだけれども、仮設の準備とか何かで7月いっぱいまで延びたのね。全員じゃないから。で、7月いっぱいで駄目なので、今度は武家屋敷の前にある民宿。熊川の人なんかが主にいたんだ。武家屋敷の脇にある「多賀来」っていう民宿に入ったの。行ったらいいでしょうって言われて。

そういうことで一番いいとこの民宿に行った。で、その民宿で、たまたま入りながら、夕ご飯のときにある人が、「今日宿見つかったの」って、「どこ？」って「県営住宅」。「そんなとこ、今さらあるわけねえべ」って言ったら、「昨日行ったんだけど、あとふた部屋空いてる」ってちゅうんだよ。「もしかするとまだ空いているかも、行ってみな」っちゅうんで、ほれで役場に行ったら、二つ空いてたんだよ。

県営住宅。会津若松市門田町っちゅう所。柿畑の一番北側の端っこにあるんだけど、御山柿の。そしたら1階と3階とふた部屋あるけんど、どっちがいいですかっちゅうから、1階は寒いから3階がいいなって3階に入ったら、3LDKなんだ。それも2人で。いいですかって言ったら、どうせ、返すところだからいいんですって、誰もいま申し込みしないんだからいいですよっていうことで。

そこに8月の26日に行ったんだからな。多賀来を出て、県営住宅に入った。あそこは40棟もあるんだよ。俺、会計やらせられた。1年でいいっていうの、2年もやらせられた。

ただ、あそこでは、面白いことをやったのは、木から柿もぎ取ることから、選別から仕事をした。ちゃんとこういう長い板があるんだ。4L、3L、2Lまで見分けるやつ。それでこう。分けていくんだ。県営住宅も俺、毎日散歩してたから。柿農家がいるわけだ。で、こんにちはって。「大変ですね」、「おい、どこから来たんだい？」、「浜のほうから」、「浜は分かる。浜のどこ？」って。「大熊」、「いいな、あんたらは。金もらってああいうとこへ入ってて。おらは何もしないのに、一銭も出ねえ、お金」。冬、山は真っ赤だった。意味分かる？　柿が（収穫されずに木に）残る。

何ですかって言ったら、売れないんですって。それで喉が渇いたもんだから、「すいません」、「はい」なんて木に登ってる人が。「柿を一つ、分けてもらえませんか。」「柿？何か」、「いや、喉が渇いたもんだから」、「そんなこと、どこでも採って食ったらいいじゃないの」って、「誰でもって泥棒したくねえから」。こんな柿一つ採ったって、誰が泥棒って言う？　好きなだけ好きなときに食べたらいい。みんな落っこちて腐るだけだもん。そういういい人、会津にはいっぱいいた。

俺、1週間ぐらいバイトやったかな。たまたま脚立が傾いて、ヒューっとなって落っこちたから転がって受け身したった。そしたら、「すいません、今週いっぱいでいいですわ」なんて言われた。けがすると困ると思ったんじゃないの。だから、行かなかったけど。そうい

う経験もした。

―避難の時、大熊町にすぐ帰れると思っていましたか。

杉本：そう思っていました。避難するったって、その避難するときに何もないわけだから。それで、避難していって、次の日の午後でしょ？　12 日の午後、それまでは分かんねえわけだから、爆発したなんて。だから、一応危険性があるから避難しろっていわれるんで、1 日か 2 日あったら戻れるんだろうっていう頭しかないから。だから、今後どうするなんていうことは全く考えないし、逆に爆発したっていうときだって、もう震度 4 なんていう地震はしょっちゅう起きていたから、体育館で天井の電灯が大揺れ。真下にいるなよなんて騒いだ頃だから、震度 4 ぐらいで平気だったからね。電話、キューキュー何回も鳴ったけど、「震度 4 か」なんていうぐらいの話。

震災の頃は、爆発したけど、どうなんだべなとか、人が死んだのかなとか、今後どうなるのかなとか、どこがどんなふうに爆発したのかなっていうそういう疑問とか持ったり、それは新聞とか何かで見てはいたけど。

だから、これから町はどうなるかなっちゅうこと、どんなふうに発展するのかなっていうことは全く考え付かない。

それで 3 日たって、4 日たって、5 日たって、そろそろ帰るっていう知らせはねえのかななんていうと、今度は新聞、テレビを見てみろっていう、だんだんには諦めムードで、もう帰れないよ。そのときに頭のいい人はうちに行って、いろんなものを持ってきたんだな。だから、そのときに放射能を浴びてる人はいるのかもしれない。

検問出来たときに、「自分のうちに行くのに、おめえらに色々なんで言われるんだ」って検問で怒った人がいるって、これは当たり前の話だわな。放射能なんていうのは、本当に目にも見えなければ、形もなければ、色もにおいもねえんだもんな。

よく耐えてきたと思う。私のことじゃなくて、みんなな。津島とか、相馬だっけか？　亡くなったもんな。自殺した人、いっぱいいるでしょ？　いま言ったこの先のことを悲観して。うちのほうにも養豚場なんかあって、ずいぶん柵を壊して逃げたブタもいたみたいだけど。プリマハムの養豚場があったんだよな。富岡との境なんだけど、小良ヶ浜っちゅう所。ウシなんかも 7 頭も 8 頭も群れていたで。あと、イノシシなんかはイノブタって。ブタのあいのこ。車なんか止めていたら、トットットッて寄ってくるんだから。話をしている目の前を、こんな大きいやつが、トットットッて 2 頭も 3 頭も行くし。

―震災後だったから苦労したエピソードとかはありますか。

杉本：土地、もちろん家も何も全部そうですけど、それは国によって買い上げられました。その中に共有地っていうのがあるのね。お墓なんかもそうだったんですけど、それ以外にも空き地とか何かがあるわけ。昔なものだから、共有地などの持ち主が「誰々他何名」と書いてある。

例えば、100 平米の土地があったとすると、「所有者は誰々　他 20 名」。この中の誰々さんは 1 平方メートルなのか十数平方メートルなのか、何も分からない。どうするかということで、この土地を共有……。みんなで持つ。個人のものじゃないから。それを賠償するのにどうしたらいいかということになったので、それを話し合いでもって、今になったらもう誰も持ち主が分からないから、均等割りにしようと。

例えば、誰々10 人いたとすれば、均等割りにしましょうと。で、それは納得しましたと。山とか何かもあるわな、それもみんな同じ方法でやりましょうねということになって、国でもってお金を払います。どんな方法がいいですかと。

今度はそのためには認可地縁団体という団体をつくらなきゃならない。つまり、共有地の補償のために認可地縁団体というものを組織しなければならなかったという。あれは震災前には全くないことだったな。

もちろん、その認可地縁団体をつくる前にも各個人の持ち物なんかも全部国に買い上げられたから、そういう面では、先祖代々、特に農家の方なんかはそうだわな、先祖代々続いたものを売らなければならない、不本意だけれども国の政策だからやむを得ないということで了承した人が大多数じゃないのかな。国が買ってくれるんだ、よかった、なんて人は、おそらくいなかった。そういうことが震災前とは違う。

もう一つは、震災前は、行政区の中で新年会とか、あるいは盆踊りとか、その地区での総合大会、運動会とか町民大会に対してとか、そういうことがあったけれども、人間がばらばらになっちゃったために、そういうことが全くできない。特に盆踊りの櫓とか何かも全部あれは津波で流されちゃって、神社なんかも流されちゃって、そういうことが地震、震災があったためにできなくなったということは寂しいことだね。変わったことでもあるし。

―区長をしていてよかったなと思うことってありましたか。

杉本：うーん……。よかったなっちゅうことは、どうだったか。よくできたかなって、区長としての務めが、区の人が満足のいくような働きができたかなという疑問はあるけれども。

だから、区長をやっていてよかったということは、今言ったその認可地縁団体なんかでいろんな勉強をさせられたことは、あるいはいろんな経験できたことはよかったことだけど、それ以外に区長をしていてよかったということ、何かあるかな。

それは、私のような者でもこうやって依頼されて仕事できるということに対しては、いくらかでも、形はないにしても、あるいは微々たる力だとしても、意見とか考えを取り入れていただけるということに対しては、それはやっぱりうれしいことだと思うね。

―これからの大熊町に対する希望はありますか。

杉本：一言でいえば昔に戻ってほしい。きょうも FTV でやってたけど、大熊町のキウイフルーツな。あと今、いわきにお世話になってるんだけれども、いわきの梨を食うたびに思う、大熊の梨食べてえなって思う。

町でも、国や県の応援をいただきながら、いろいろな計画を立てて進めているので、それらの計画が予定通りに進んで、一日も早く、一人でも多くの町民が戻れるようになって欲しい。子供も働く人も、高齢者も、昔のような生活が出来るよう、関係者の方々にお骨折りをいただきたいと思うし、それは私のみならず、全国にちりぢりになった町民も同じだと思う。

―震災を経験してない、震災を知らない人に伝えたいことはありますか。

杉本：それは、古い話、第二次世界大戦もそうなんだよね。何年か前だけど、テレビ見てて、8 月 15 日は何の日ですかって聞いたら、タレントの誕生日とか、どこどこ地区の花火大会とか、そんな答えしか出てこねえんだ。俺は 8 月 15 日っていったら、自然にこう（合掌）なるんだよな。終戦記念日でしょう。それと同じように、ここの地区も同じ。都会でなんかはほとんど原発事故のニュースなんか出ないっていうんだから。

それはやむを得ないと思う。で、爆発してすぐだったな、あれ、テレビを観てたらば。（都会では）「電気来ないから、ゲームもできないから早く電気来ればいいのに」と若い女の子が言ったことあったな。そういうことでなくて、やっぱり歴史の中で、初めてのわけでしょう、これから少しでも一日も早く原発事故をなんとか収束できるような努力をぜひしてもらいたいな、若い人。（避難所で）ちっちゃい子供がこうやって破けた段ボール持って、それにパンを載っけて運んでいく姿。あるいは洗濯場や干し場がなくて女の人が困ってるなんていうこと、ちっちゃい子供は泣くしね。

私らがいたところで話すと、組み立て式の段ボールが届いたんだよな。これを使えば他から見えなくなる分お使いになる本人も逆に他が見えなくなりますからねというのが一つ。あと、緊急のときにどこから抜ければいいんだか覚えておいてくださいよと。ということを話したら、希望者が誰もいねえ。何かあったら困るっていうこともあったのかな。だから、ずっと見渡せた。その一言で。こんなテレビで見るアフリカ難民のような経験はして欲しくない。

あとは、その原発を使わないでも……でもな、今朝の新聞なんか見ても書いてあるけど、だって、あの爆発事故を受けたときに政府はなんて言った、アナウンサーが「これから原発はどうしますか」って言ったら、「原発なんてこと、思いも付かない」って言ったんだよな。考えも及ばないって。ところが、デブリ除去も、13 年かかってもまだ 0.7 グラムのやつ今持ち上げただけなんでしょ。デブリは 800 トンあるんだぞ。それ、どうやって処理するの？　福島県が最終処分地にならないように、なんとか頑張ってください。福島県が最終処分地になることは大熊が最終処分地になるんだ。原発を埋めるかという話もあったけれども、それはどうなるのか分からない。ただ、東電として、あるいは国としては、その技術を確立するためにおそらくデブリを除去したいっていうふうに言ってるんでしょ。だけども、おそらくは最初の計画通りには取り切れねえんでねえかな。

―原発についてはどう思っていますか？

杉本：だから、個人的には、今言ったように、今の事故処理を速く、一日も早くしてもらいたいっていうことが一つと、あとはおそらく日本はとにかく資源がないわけだから、火力にしても。で、風力なんかやってもね、こういうことあったんだよ。東電と私らの地区っていうのは同じとこだから、夫沢地区だから。年に一度、交流会を開いたんだよな。そのとき、私がこういう質問をしたの。「あなた方は電気屋さんだから、原発以外にいろんな発電の仕方あるけど、研究しているのか」って言ったらば、なんて言ったと思う？　「もちろん私どもはプロですから、いろんな研究をしています」と、「ただ、言えることは、ぬるい風呂をいくら集めても熱い風呂にはなりません。ご理解ください」って。「分かった」って。それから、「防護柵ではカラス一羽入っても発見できるように防護しています」と。という話があるぐらいで、あとは事故処理を早くしてもらいたいということと、遠からず原発再稼働始まるので、第2原発が稼働する一つの箇所になるんじゃないかなという危惧を持ってますね。

あとは、今言ったように、原発以外のものでも、風力発電も電磁波が出るとか音がうるさいとかって、何かいろいろあるからね。今、大熊町役場の前にある羽根、どこに使うの？　川内持っていくの？　あれ、何メーターあるんだ。羽根な。あんなでっけえの。びっくりした。俺の生きてる内には何にもねえかもしんねえけど。だから、第2原発なんかは少なくとも稼働しないような形で。13年過ぎたってコメント書いたけど、不満なのは、帰るならば除染しますでしょ。帰らなかったらそのまま放置すんのかって。もともとはきれいだったんだよ。汚したのはわれわれ持ち主でねえんだよ。それを、帰る意思があれば除染しますって。帰らなかったらそのままだべって。そんなことしておいたら駄目だよっていうことを。俺、環境省が来るたんび言ったの。われわれは買い上げされたからっていうことはあるけれども、それなりの補償をもらったと。同じ条件で避難している人、夫沢3区だからな、この人たちの補償は何考えてんだって言ったって、「心配ですか」って。「当たり前だべ」って、同じ立場なんだもの。なんで保障しないのって。

こういうことあったのね。墓地が国によって買い上げになったという、お骨なんかも入ってるわけだ。お墓駄目になったからって、ほかにつくらなきゃならない人も出てくるわけ。我々もそうだけどね。そのときに、お墓を移動した、つくったというときに、150万以内で東電は賠償したの。で、環境省は、中に祀られている人のことを補償したわけだ。それは、いつ亡くなったか、何歳で亡くなったか、つまり亡くなってからの年数と、亡くなったときのその年齢でもって補償したわけだ。ただし、30年を超した場合にはほんの微々たる補償額しかないよと。それはどこから持ってきたかっちゅうと、ダムとか何かで、国でも（他に基準が）ないから、そういうのを転用したんだよね。30年でゼロに近いというのはどんな理由なんですかというと、ほとんど土にかえると。この年限なので30年としていますと。

それでね、こういうことがあったんだ。最初、東電は、連絡しないで移した場合には賠償しないってなったのね。それから、こういう現実があるのに賠償しないのはなんだと言った

らば、じゃあとにかく新しく墓を造ったということが分かればその時点でしますと。国のほうでは、国に移しますって言う連絡がなければ魂の補償はしませんとなった。「環境省に断らないで移動した場合には補償しません」と。「なんでだ」と言ったら、「魂がないんだから補償の対象になりません」って。

「もし、そういう考えでもって進めるんなら、やってみなさい」って。「私は一人の行政区長として一人の墓地管理者として今後一切協力しないから」って。それから 10 日ぐらいして区長会があったんだよ。そしたら、過日お墓の補償で杉本区長からありました件については環境省で再考した結果、無断で移動しても、そこにあったということがあれば補償の対象になりますからと。薬効いたなと思った。だって、それは大熊だけでねえ、夫沢地区だけでないんだから、他町にもあるし、町にも他にあるわけだから。

それで恩恵受けた人、いっぱいいると思うよ。

だから、皆さん方も社会に出て行くと思うけど、やっぱり、言うならばな、「毒にもなる、薬にもなる」っていう言葉があるんだよな。この職場に入ったときには、誰に話をすればいいか、相談をすればいいかっちゅうことをまず見付けることから始まる。勉強するんだよ。間違ったら大変だからね。この人だと思って言ったらば、例えば課長の悪口言ったら筒抜けになったなんて、そういう人間では駄目だからね。それで、そういう人が職場に一人いると、安心して仕事できんだ。間違っても、「おまえ、なんだ、この間こういうのあったすけな」「はい」「駄目だぞ」って言ってもらえれば。それが、「自分は分かってます」なんてな、ろくすっぽ分かんねえでいて分かったふりすると、あいつのことは構うなって言われたら、人間終わりだから。勉強も大事だけんども、世の中のことも勉強しといたほうがいいよ。

以上